

# 講師資格認定オーディション『筆記試験対策』 ～オルガン科編～

9月号のピアノ科編に続いて、今月号ではオルガン科の講師資格認定オーディションの筆記課題について試験結果を分析し、特に正答率の低かった問題を取り上げ解説をしていきます。この解説を参考にして問題のポイントを押さえ、今後の勉強に役立ててください。

## [R5]

実際の音楽を聴いて答える問題では、ジャズのスタイル(ラグタイム、スイング、モダン)を答える問題の正答率があまり高くありませんでした。これらのスタイルには、もちろん音楽の語法上の違いがありますが、そのほかに、ラグタイム、スイング、モダンは、典型的な楽器編成が、それぞれほかのスタイルと異なっています。それを参考にして答えを導き出しても良いでしょう。

**IV. (1) 次の文章が正しければ○、間違っていれば×で答えなさい。**  
設問 22. ミュージック・アトリエのソロ・パートは単音での演奏のみ可能である。  
正解: ×

ミュージック・アトリエのソロ・パートは、ソロ・モードの選択によって3つの発音の仕方を選ぶことができます。それは「TOP NOTE」、「LAST NOTE」、「POLYPHONIC」で、それぞれ、複数の鍵盤を弾いたときに、「TOP NOTE」では一番高い音が、「LAST NOTE」では最後に弾いた音が、「POLYPHONIC」ではすべての音が、それぞれ発音されます。発音の仕方を「POLYPHONIC」に設定しておけば、複数の音を出すことが可能になりますので、答えは×になります。

**V. (1) 次の楽譜の [ ] 部分に適したコードを選択肢より選び、番号で答えなさい。重複可。**



〔選択肢〕

- ① B 7    ② Fm7    ③ Dm7    ④ F7  
⑤ Gm7    ⑥ G7    ⑦ D7    ⑧ C7

正解: (31) ⑤ (32) ⑧

メロディーからコードネームを判断する問題です。このような問題を解く際には、コードとメロディーラインの関係と、コード同士の機能的なつながりの2つを考慮し、より自然な流れを探ることが大切です。ここでは、あまり正答率の高くなかった(31)(32)を例に取り、そのような観点から答えを導いてみましょう。まず、コードとメロディーラインの関係から考えてみます。この際、1つの目安として、「音価の長い音や、跳躍進行の直前の音は和声音である場合が多い」ということが挙げられます。もちろん例外はありますがまずはこの考えに従って見ると、2小節目3つめの音シ(長い音価)と、3小節目3つ目の音シ(跳躍進行の直前の音)は和声音ということになり、それらを構成音とするコードは、選択肢の中にはB♭7、Gm7、C7の3つあります。このうちB♭7については、2、3小節目ともメロディーにA音の音が含まれていることから、不適当であることがわかります。

ここまでの段階で、当てはまるコードはGm7とC7の2つに絞られました。次はコード同士の機能的なつながりを考えてみます。(31)の前の小節と(32)の後の小節はトニックであるF6。Gm7の機能はサブドミナント、C7の機能はドミナントであることから、この4小節において、定石のケーデンスである、「I→II→V→I(トニック→サブドミナント→ドミナント→トニック)」が行なわれていると推測することができます。Gm7とC7を逆にしますと「トニック→ドミナント→サブドミナント→トニック」というあまり一般的でない進行になりますから、ここでは(31)

はGm7、(32)はC7とするのが適当です。

今回は解説という役割のため、このように理論的に答えを導き出しましたが、その理論を身体化する(体で覚える)ことが音楽の学習において大事です。いろいろな曲に触れ、さまざまなコード進行やメロディーを体験することによってのみ、そのことが可能になります。

**IV. (2) 次の問いに、○×で答えなさい。**  
設問 44. オルガン科ミュージック・パラダイスコースの教本である「ミュージック・パラダイス」シリーズは、全3巻である。  
正解: ○

オルガン科ミュージック・パラダイスコースの教本である「ミュージック・パラダイス」シリーズは、①入門編、②応用編、さらに③はオルガン編とピアノ編の2冊全3巻になっており、①入門編と②応用編は、ピアノ科ミュージック・パラダイスコースで共通のものを使います。それぞれのコースの教本に対する知識は重要ですのでしっかりおさえておきましょう。

## [R4]

R4は問題ごとの出来不出来の偏りはあまりなく、楽典やそのほかの音楽常識問題はもちろん、コードやカウンターラインに関する問題などの比較的難しい問題も、皆さんよく理解されているようでした。ただ、和音聴取の出来はあまりよくありませんでしたので、合格された方も、もう一度確認していただきたいと思います。

**I. これから、音楽を5曲流します。主旋律を演奏している楽器をそれぞれ①～③より1つずつ選び、番号で答えなさい。**  
設問 5.  
①アルト・サクソ    ②バリトン・サクソ    ③ソプラノ・サクソ  
正解: ③

サクソフォーンはさまざまな種類がありますが、主なものは、ソプラノ、アルト、テノール、バリトンの4種です。比較的似た音色を持っていますが、その中でも各楽器の個性はあり、一般的にソプラノ・サクソは明るく軽やかな音色が特徴です。形状もほかの3つと異なり、ソプラノ管にカーブのないまっすぐな楽器(直管)です。アルトやテノールに比べると耳にする機会は少ないかもしれませんが、とても魅力のある楽器ですので、ぜひ聴いてみると良いでしょう。

ジャズなどでよく用いられるほか、例えばクラシックでもラヴェル作曲「ボレロ」の中にソロがあります。ちなみに会場で流れた音楽はアメリカのバンド、ウェザー・リポートの曲でした。

**II. (3) 和音聴取**  
設問 8. これから演奏する和音と、次の楽譜とをくらべ、各小節内のすべての和音が正しいものには○を、1音でも異なっているものには×を記入しなさい。(4回演奏)



正解: 実際に演奏された和音



R4はR5より一声増えて三声となり、真ん中の声部がとりづらいためか、誤答が目立ちました。それでは、その内声を確実に聴き取るためにどのような方法が考えられるでしょうか。例えば、4回の演奏のうち、1回目か2回目のうちに両外声をとってしまっ、残りの演奏で内声を集中して聴くのも1つの方法です。この方法はR3の和音聴取においても有効であると思います。ぜひ試してみてください。

また普段音楽を聴く際にもメロディーだけでなく、ベースの進行や内声の動きなどに注意して聴いてみるようにすると、コツがつかめるのではないかと思います。

VI. 次の問いに、○×で答えなさい。

設問 44. オルガン科 R2 講師資格の取得には、アドバンス演奏オーディション 4 級以上の保有が条件である。

正解：○

講師資格を取得するために必要なアドバンスコース演奏オーディションの級の取得は次のようになっています。

R5 → 8 級、R4 → 6 級、R3 → 5 級、R2 → 4 級、R1 → 3 級  
講師資格を得るために必要なことなので、おさえておきましょう。

[R3]

R3では、特に聴音課題の旋律聴取、リズム聴取、和音聴取の3つがあまりよい出来ではありませんでした。これらの問題は、本質的には実技試験の性格を持っており、紙面による解説では不十分ですがここでは一般的な留意事項を記しておきます。

リズム聴取をするうえでのポイントは、常に拍を見失わないようにすることです。この級では4/4拍子が出題されますが、1小節内の4つの拍を常に意識すること、そこに打点がないときはタイ、又は休符として明確に意識することで、全体のリズム構造がはっきり見えてきます。

旋律聴取では、リズムをとることに加えて、音高をとらなければなりません。その2つを同時に行なうことの困難さを解決するためには、最初に、各小節の頭の音をとることをおすすめします。こうすることによって、各小節内のリズム構造も見やすくなりますし、音楽を小節毎に分解することによって、より把握しやすくなります。そしてなにより、書くことに集中してしまつてどの小節にいるかを見失ったときに、復帰することができるというのも、大きなメリットです。

和音聴取に関しては、最初に両外声(ソプラノ、バス)をとることをおすすめします。両外声はとりやすいのではないのでしょうか。両外声がとれば気持ちにも余裕ができますし、また万が一内声を聴き逃してしまったときでも、両外声から推測することもできます。

この種の問題は言ってみれば音楽を記号化することです。私達は、しゃべった言葉や聞いた言葉を文字に表すことができます。同じように聴こえてくる音楽も音符という記号に表すことができるわけです。ですから言語を習得するときのように、普段からいろいろな音楽に触れ、また楽譜を読み、音から音符を連想したり、逆に音符から音を連想したりできるようになれば、この種の問題を解くのがずっと楽になるはず。

III. 次の楽譜を見て、問いに答えなさい。

設問 9. この曲は、何調ですか。①～④より選び、番号で答えなさい。

- ①ハ短調 ②ヘ短調 ③変イ長調 ④変ホ長調

設問 10. 下から2段目のパートはアルト譜表で書かれていますが、ト音記号あるいはヘ音記号を使って記譜する場合、どのように書くことができますか。曲の冒頭から4小節目までを、解答用紙の五線に記しなさい。

正解：設問 9. ② 設問 10. 省略

曲の調を判定する問題ですが、この楽譜の場合、調号が付いていますので、おのずと候補は、4つのフラットを持つ調の変イ長調かヘ短調の2つに絞られます。調性というのはドミナント→トニックの進行によって確立されます。この楽譜の場合、ヘ短調のドミナント→トニック進行は、10回近く現れるのに対し、変イ長調の同進行は4回ほどしかありません。また、ヘ短調のそれが曲の始まりと終わりや、8、9小節といった楽節の重要な接合部分に現れるのに対し、変イ長調のそれは、5、6小節目や13、14小節目といった、楽節中の一時的な転調部分と解釈できる場所にあることから、曲全体の調は、ヘ短調とするのが妥当です。また端的に、ヘ短調の導音であるE音が頻繁に現れることから、ヘ短調である、と結論を出すこともできます。

余談になりますが、バロック時代には現在のように調号と調性の体系が確立されていなかったため、調号だけで調を判断することができない曲がありますが(例：ト短調であるのに調号は♭1つ、ホ長調であるのに調号は♯3つ、など)、その場合でも、上のように、ドミナント進行やそれに伴う導音の現れ方を注意深く観察すれば曲の調性を判断できます。

アルト譜表をト音譜表、またはヘ音譜表に書き直す設問10では、音は合っているも、音域を間違えている回答が目立ちました。アルト記号は第三線がドの音であることを示していますが、このドはト音譜表においての下第一線上のド、ヘ音譜表においての上第一線上のドです。ですから、ちょうどト音譜表とヘ音譜表の間を埋めるような役割を持っていることがわかるでしょう。

V. (1) 次のコードの中で、←で示された音がコードのどの構成音になっているかを、それぞれ①～④より選び、番号で答えなさい。

設問 27

- 【選択肢】① 4th ② 11th ③ 3rd ④ root

正解：④

この種の問題を解くには、まずルート音が決まらなくては、各音を構成音として解釈することもできません。この問題の場合、コードはC♯、A♯、F♯という3つの音からできていますので、F♯音をルートとしたメジャートライアドです。よって、トップノートのF♯はRootになります。①または④と答えた方はおそらくベースのC♯音をRootと解釈し、よってF(♯)音を4thもしくは11thと答えた方が多かったのではないかと思われます。

V. (2) アレンジ課題

設問 31. 次のメロディーと書かれたコードに合う左手パートとベースを考え、楽譜を完成させなさい

この問題は全体的にはよくできていましたが、楽譜の書き方、臨時記号の付け忘れ、構成音のちょっとしたミスなど、注意次第で防げるようなミスが多かったようです。また最後の小節のA♯dimの構成音はA♯、C♯、E、(G)です。特に難しいコードではありませんが、間違いが目立ちましたので確認してください。また、左手のコードについては、コード構成音のどの音をトップノートに持ってくるかによって響きが変わります。横のラインも考えながら、最良のボイスングを探すと良いでしょう。

[R2]

リズム聴取、和音聴取があまり良い出来ではありませんでした。リス

△聴取に関しては、R3の解説をご参照ください。また、この級の和音聴取は2声の旋律を聴き取る問題ですので、今までとは違った対策が必要になります。

最後のアレンジ課題、指導法に関する問題は難関ですが、比較的良好にできていました。指導法に関する問題は、できる限り具体的な指導方法を多く記述すると、さらに点数の上積みが見込めます。

**II. (3) 和音聴取—2声。大譜表で、上声と下声を高音部記号と低音部記号に分けて書きなさい。  
(楽譜は紙面の都合により省略)**

2声の旋律聴取では上声、下声を分けて聴き取ることをおすすめします。全部で5回演奏されますから、例えば、最初の2回は上声、次の2回は下声、最後の1回で今まで聴き逃したところを聴いていく、というのはいかがでしょうか。全部を完璧にとるのは難しいかもしれませんが、できる限り空白をなくすことが良い点数に結び付きます。

このような2声の対位的な楽曲は、バロック時代に多くの作例を見ることができます。J. S. バッハの2声のインヴェンションが良い例ですが、何より、通奏低音とソロ楽器の2声部による作法はこの時代の典型的な作曲法でしたし、この問題も概ねそのスタイルに乗っ取って作られています。そのような作風の趣味や特徴を感得することで、より問題が解きやすくなるでしょう。

**III. (1) 別紙のオーケストラ曲の楽譜を見て、次の問いに答えなさい。**

設問 13. この曲の作曲者は誰ですか。①～④より選び、番号で答えなさい。

- ① ハイドン
- ② モーツァルト
- ③ ベートーヴェン
- ④ メンデルスゾーン

正解：③

楽譜はベートーヴェンの交響曲第五番運命第四楽章の冒頭でした。「運命の動機」で有名な一楽章に比べると知名度は低いかもしれませんが、第三楽章の終結部(c mol)から長いクレッシェンドを経て第四楽章(C dur)に入る部分は、「暗から明」へ至るこの楽曲の中の白眉であり、最もドラマチックな部分であると言えるでしょう。

では、この問題は、このように曲を「知っているか」ということを問うたのでしょうか。必ずしもそうではありません。もちろん知っているにこしたことはないのですが、もし仮に知らなかったとしても答えを推測す

ることはできます。

まず、楽器編成を見てみましょう。(ここでは紙面の都合上、楽譜の前半のみ掲載しています)ピッコロ、コントラファゴット、トロンボーン [11] が用いられています。これらの楽器を交響曲に用いたのはベートーヴェンが最初でした。選択肢にあるモーツァルトやハイドンは、この3つの楽器が揃う曲はおそらくないのではないのでしょうか。

また曲の内容に目を向けてみますと、目立つのは執拗なまでの主和音と属和音の交替です。このような執拗さはこの楽章の終結部において存分に発揮されていますが、この冒頭部分においてもみられていて、冒頭から6小節を主和音と属和音のみで構成する強い力感、優雅で端正な作風のメンデルスゾーンにはないものではないのでしょうか。

この曲に限らず、オーケストラ曲を鑑賞する際には、音を聴くだけでなく、オーケストラスコアを読みながら曲を体験することをおすすめします。クラシック音楽は「楽譜を書くこと」に大きく依存して発展してきた音楽だからです。

**III. (2) 楽器について、次の文章が正しければ○、間違っていれば×で答えなさい。  
設問 18. チェンバロは、打楽器とも言える。  
正解：×**

ここではいろいろな楽器の発音構造が問題になっています。その中で打楽器とは、打つ、振る、こするなどによって発音する楽器であり、太鼓、シンバル、鉄琴や木琴など、さまざまな楽器がこれに含まれます。

では、チェンバロとはいかなる発音構造を持った楽器でしょうか。チェンバロの内部にはピアノと同じように弦が張り巡らされていますが、発音の仕組みは内部の弦をハンマーで叩いて音を出すピアノとは違い、内部の弦を弾いて音を出します(このような発音構造の帰結として、チェンバロは打鍵の速さによって強弱をコントロールできません)。つまり、チェンバロは発音体を打つ、振る、こするなどによって音を出すわけではなく、よって、打楽器とは言えません。そうではなく、弦を弾いて音を出す撥弦楽器であると言えます。

ただ、ここで挙げたピアノやチェンバロはその発音構造からそれぞれ打楽器、撥弦楽器と言えるにもかかわらず、一般的には両者とも鍵盤を持つ面を重視し鍵盤楽器と言われることも多い楽器です。

余談ですが「チェンバロ(Cembalo)」とはドイツでの呼び名で、同じ楽器を英語では「ハープシコード(Harpsichord)」、フランス語では「クラブサン(Clavecin)」と呼んでいます。

**III. (3) オルガンについて、次の文章が正しければ○、間違っていれば×で答えなさい。  
設問 20. ミュージック・アトリエ AT-90S、AT-80S では、足鍵盤にもアフター・タッチが搭載されている。  
設問 23. ミュージック・アトリエのマニュアル・パーカッションの音量を変えると、ミュージック・スタイル(オートリズム)の音量もそれに従って変化する。  
正解：設問 20.× 設問 23.×**

ミュージック・アトリエの機能に関する問題です。比較的専門的な問題ではありますが、この機会に是非理解を深められるといいと思います。

設問 20 はアフター・タッチに関する問題です。ミュージック・アトリエ AT-90S、AT-80S ではアッパー鍵盤のみにアフター・タッチ機能の効果があります。よって足鍵盤には同機能が搭載されていません。また、アッパー鍵盤であっても、音色によってはアフター・タッチの効かないものもあります。

設問 23 はマニュアル・パーカッションの問題です。ご存知の通り、マニュアル・パーカッションはローワー鍵盤で鳴らすことができますが、その音量はローワー鍵盤と一緒に括弧して管理されています。ですので、マニュアル・パーカッションの音量を変化させても、ミュージック・スタイル(オートリズム)には影響がありません。